

第2章 福祉教育の進め方

1. 福祉教育のカリキュラム作成のポイント

児童・生徒の発達段階に応じて、学校として6年間（3年間）の長期計画のもとで、ねらいを明確にすることが必要です。その際には、学校教育目標と福祉教育の目標を関連させ、学校全体として共通理解しておくことが大切です。

年間指導計画の作成のポイント

全教育活動を通して実践的な態度を育成すること

- 福祉教育は人権尊重の精神に根ざした教育活動であり、国語や社会などの各教科、人権教育、特別支援教育、道徳教育、平和教育など、様々な「教育」と共通の基盤をもつものであることから、それらを並列的に扱う発想ではなく、互いに補いあって組み合わせられるよう横断的・総合的にカリキュラムを作成する。
- 聞き取り学習や体験活動などを通して、障がい者や高齢者などの生き方や取り巻く課題を学び、実践的な態度を育成する指導の観点をいれる。
- 障がいの特性、障がい児（者）、高齢者、その周りの人々などの状況や社会福祉を広く理解するという観点から、学年の系統性を考慮する。

身近な人への思いやりにつなげること

- 様々な取組みにより、身近な障がい児（者）や高齢者への理解、いじめのないクラスづくりなど、児童・生徒の日常生活につながるようにする。また、学校に在籍する障がいのある仲間と「ともに学び、ともに育つこと」を通して、より深く理解するという観点を盛り込む。

地域に根ざした交流を行うこと

- 地域に根ざした福祉活動になるよう、地域の支援学校や障がい者・高齢者の施設などとの交流を積極的に組み込み、地域のニーズにあった学習活動を展開しながら、児童・生徒に対してエンパワーメントを促進する。（個々がもつ能力を引き出し、児童・生徒自らが問題解決に向かうことができるように援助する。）



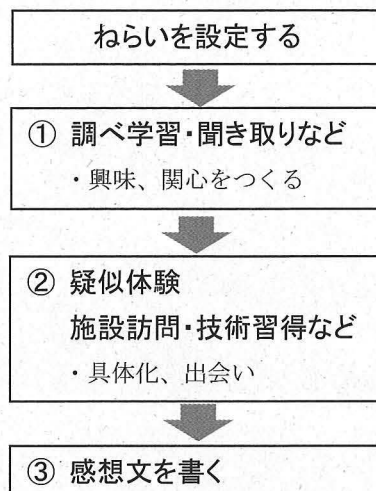
<第2章 参考資料>

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| ○ 福祉教育実践ハンドブック | （発行：社会福祉法人 全国社会福祉協議会） |
| ○ 先生のための福祉教育ガイド | （発行：社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会） |
| ○ 福祉の心の種をまく | （発行：社会福祉法人 川崎市社会福祉協議会） |
| ○ 共に生きること共に学びあうこと | （発行：大学図書出版 原田正樹） |
| ○ 「ともに学び、ともに育つ」障害教育の充実のために | （発行：大阪府教育委員会） |

2. 福祉教育の指導方法

(1) これまでの福祉教育の課題

- これまでの学校における福祉教育のプログラムは、右図のようなパターンが多かったのではないのでしょうか。
- 車椅子体験やアイマスク体験、高齢者体験などの体験学習は、指導者がそのねらいをしっかりとおさえないと、子どもたちが、少しの体験であたかも相手を理解したかのような一面的なとらえ方をしてしまったたり、高齢者や障がいのある人を、「大変な人」「かわいそうな人」という一面的なとらえ方をしてしまうような「貧困的な福祉観の再生産」(日本福祉大学：原田正樹准教授)に終わってしまう危険性があります。



(2) 指導のポイント

体験学習の目的を明確にすること

- 疑似体験自体や点字や手話などの技術習得が目的ではありません。疑似体験の目的は、高齢者や障がいのある人が安心できるサポートとは何かを考えたり、そのための人とのつながりを構築したりすることにあります。手話や点字学習の目的は、視力や聴覚に障がいのある人が社会参加を図る際のサポートのあり方を考えたり、当事者とのコミュニケーションを実際に図るためであるべきです。体験学習の目的をおさえ、子どもたちに主体的に考えさせ、その後の振り返りをしっかりと行うことが重要です。

主体的に考える力を育てること

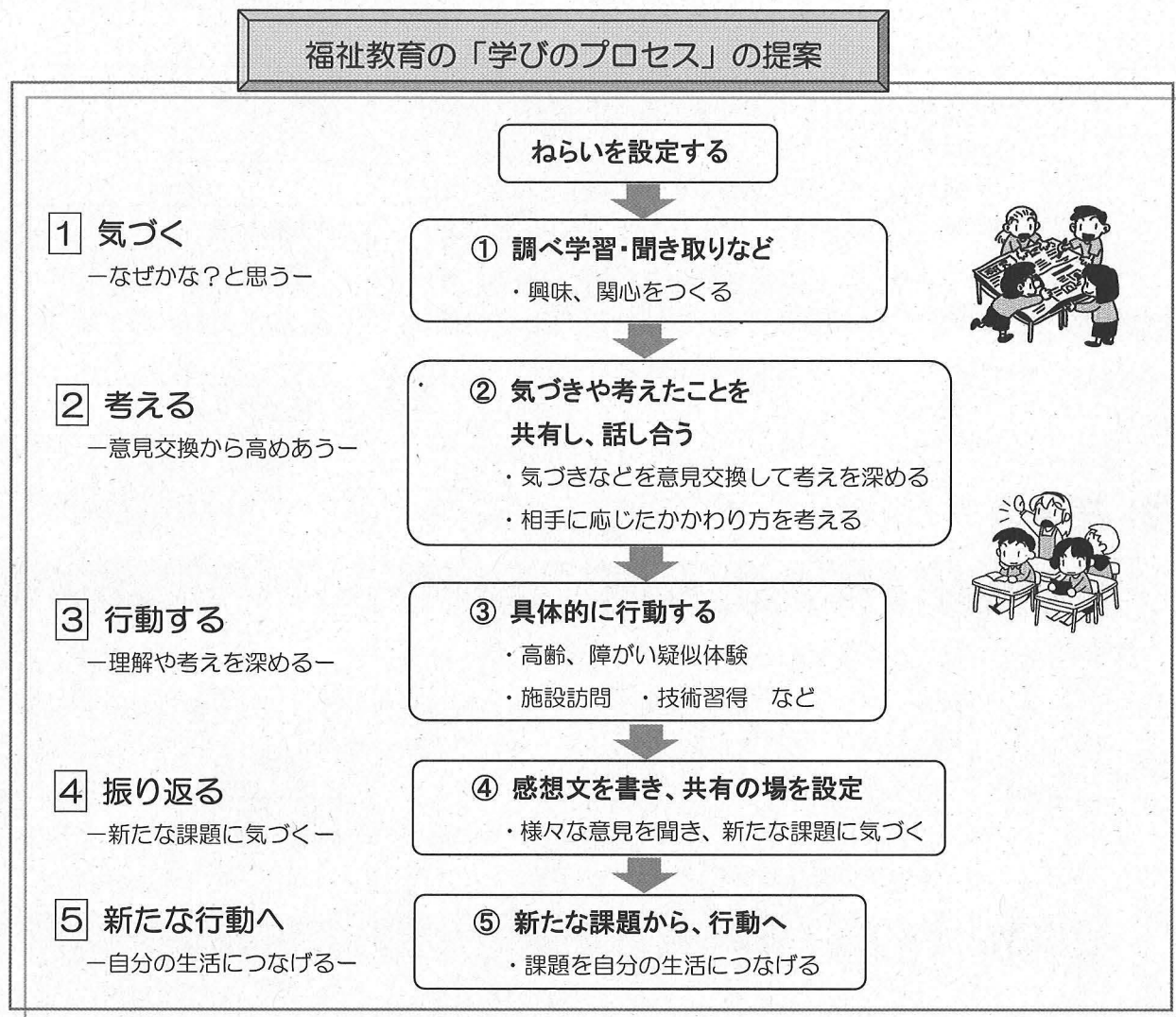
- 福祉教育は、現実に行っている現在進行形の問題を学習素材としているという特徴があり、現実の課題に向き合う学習であるため、誰も確実な答えをもっているわけではありません。
- 「正解を教わる」のではなく、「解決策を考える」という性格を帯びています。受動的に知識や情報、価値観を受け取るだけではなく、児童・生徒自らが主体的に考え、解決に向けてのヒントをつかみとることが求められます。

事実を、自分とのつながりとしてとらえること

- 単なる客観的な知識としてではなく、自分とのつながりとして事実をとらえ、解決に向けての行動を起こすことにつなげるためには、「実感としてわかる」ことが不可欠になります。
- 自分にとって関係のあるものとして福祉を学ばないことには、問題解決に向かう行動には決してつながっていきません。充実感をともなった学びをもたらすものとしての体験学習の効果が注目されます。

(3) プログラムの提案

子どもたちの心に響く、福祉教育の「学びのプロセス」をつくるために、これまでのスタイルに加えて次のような要素を取り入れたプログラムを提案します。



ねらい—学習目的・ねらいを定める—

子どもたちが何について学ぶのか、最終的に子どもたち自身の身近な生活につながるのか、学びの興味や関心を明確にして学習素材を定めます。

1 気づく—なぜかな?と思う—



子どもたちが障がいのある人や高齢者などと出会って、思いや生活について調べるとき、多くの場合において自分の認識を新たにする（気づき）があります。

例えば、障がいのある人の思いや生活を聞き、障がい者を取り巻く社会の課題に気づきます。また、障がいのある人と自分との違いや同じ部分に気づいたり、人間の心と体の持つ力について驚いたり感動したりすることもあるでしょう。さらに、障がいのある人や周りの人の、あたたかさやひたむきさなどにふれて、何かを感じ、考えていくこともあるでしょう。

まず、子どもたちが「なぜかな?」「もっと知りたい」と思えるような場を設定しましょう。

2 考えるー意見交換から高めあうー

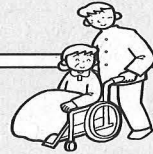


子どもたちは、出会いや調べ学習での気づきなどを意見交換することで、考えを深めていきます。

意見交換が活発になり、考えが深まっていくためには、事前に自分自身の意見をしっかりと考えたり、話し合うテーマを明確にしたりすることが必要です。

その際には、相手と相互に理解するためには、「どのようにかかわっていくのか」ということを考えることが重要です。ここでは、障がいの特性や支援・介助の仕方などの一般的な知識と、一人ひとりの相手にあったかかわり方や自分自身をどう理解してもらうかなどを試行錯誤しながら考えていく過程が大切です。

3 行動するー理解や考えを深めるー



自ら「課題」意識をもち、人と人とのつながりを大切にしたいと思うと、自然にいろいろな「行動」につながるものです。

②で考えた「かかわり方」を、人とつながる具体的な行動（福祉施設訪問、地域のボランティア、募金活動など）に移したり、ポスターや文章表現で啓発活動を行ったり、障がいのある人とのコミュニケーションを図るため、車いすの操作や手話や点字などを学習することもあるでしょう。それぞれの行動の仕方や内容は様々だと思います。

このような体験をすることにより、理解や考えがより深まっていくことでしょう。

4 振り返るー新たな課題に気づくー

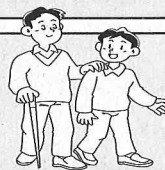


行動し、実際に人と関わることにより、新たな「気づき」があります。そのような「気づき」を、周りと共有すると、新たな「課題」がみえてきます。

その際には、出会いや体験を通して学んだこと（「気づき」）が、身近にいる障がいのある仲間や高齢者、幼児などへの理解から行動につながっていくことが重要です。

そんなとき、子どもたちは「ちょっとかわった自分」に気づくことでしょう

5 新たな行動へー自分の生活につなげるー



＜新たな行動の例＞

- * 身近な仲間や家族が困っていることに敏感に気づき、積極的に助けることができるようになる。
- * 児童会（生徒会）や学年、学級でのボランティア活動や募金活動に取り組む。
- * 子ども会や社会福祉協議会などの地域の福祉活動に積極的に参加するようになる。
- * 障がいのある人とコミュニケーションをもっととりたくなり、点字や手話などの学習をする。
- * 地域のフェスティバルを行う際に、障がいのある人も参加しやすいような配慮を考えて企画する。
- * 人は一人ひとり違う存在で、それぞれの特性があり、様々な可能性を秘めていることを理解し、周りに対する偏見がなくなったり、自尊感情を高めて意欲がもてるようになったりする。
- * 障がいのある人や高齢者が「どう生きてきたか」にふれて人としての知恵を学び、改めて自分の生き方を振り返り、前向きに生活できるようになる。

3. 福祉教育を進めるためのポイントQ&A

Q1

「疑似体験」「施設訪問」などの体験を行う際、児童・生徒が、障がいや高齢は「大変だ」「かわいそうだ」「だから助けてあげよう」という一方的な考え方をしないようにするポイントは？



A1

目的やねらいを明確にして行う

- ねらいがはっきりしないままになんとか行われ、障がい者や高齢者に出会ったら「助けてあげましょう」などといった一方的な印象を与えるだけの疑似体験では、相手の気持ちを理解できません。
- 疑似体験は、あくまで「気づき」の導入の一つであって、当事者と交流して思いや生活を聞き取るなどの、その前後の展開が不可欠です。
- 生命の大切さや人間の尊厳を学ぶ中で、疑似体験により「老いる」とは、「障がい」とはどんなことなのかを理解することが重要であり、目的やねらいを明確にして、関わる指導者全員でプログラムを検討し、共通理解しておくことが大切です。

双方向の学びあいを大切にする

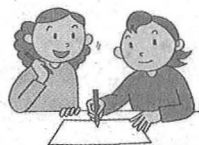
- 施設訪問では、「してあげる」という、支援する側の視点だけでプログラムをつくるのではなく、相手が何を望んでいるのかを考えて、相手との交流を通して「学びあう」という視点が大切です。
- 例えば、施設訪問において児童・生徒が出し物を披露し、プレゼントを届けるという一方的なプログラムではなく、利用者と一緒に楽しんだり、学びあったりするなどの交流を通じて、ポジティブな姿（イメージ）をとらえ、その存在の尊さを知ることが重要です。

「振り返り」と「周りとの共有」を大切にする

- 従来の福祉教育では、事前学習に重きをおく傾向があり、体験の後は「感想文」を書いて終わりというような「振り返り」が十分になされていないプログラムがありました。
- しかし、この「感想文」から始まる授業こそが大事であり、一人ひとりの「振り返り」によって、自分自身が確認した「気づき」や「変化」が、「周りとの共有」によって刺激を受け、さらなる「気づき」へと向かうことでしょう。
- 自分とは違う「気づき」や角度の違う視点にふれることによって、一つの体験からテーマに対する視野が格段に広がり、新たな「課題」がみえ、行動につながっていくでしょう。

Q2

手話や点字の技術習得により、コミュニケーションの方法として聴覚障がい者とは手話、視覚障がい者には点字というステレオタイプの(固定的・画一的)なとらえ方をしないようにするポイントは？

A2

障がいには様々な状況があることを学ぶ

- 例えば、聴覚障がい者には、音声言語獲得前の失聴者である「ろう者」の人と音声言語獲得後の失聴者である「中途失聴者」の人がいます。また、聞こえにくいけれど、聴力が残っている人もいます。
- 障がい者や高齢者を取り巻く課題を理解するには、それぞれの障がいの状況に応じて、そのコミュニケーションの方法や支援の方法が様々であることを知ることが重要です。

自分と他者との関わりを学ぶ

- 点字や手話を知ることが大切ですが、単に「技術」を正確に覚えることが目的ではありません。コミュニケーションの一環として、いかに相手に近い立場で考えてふれあうことができるかということに目的があります。
- まずは、視覚や聴覚に障がいのある人との出会いを通じて、日常生活の状況を知り、その生き方を学びながら、その人とつながりたいという気持ちを育むことが大切です。
- その上で、安心できるサポートのあり方やコミュニケーションのとり方を考え、よりよい人間関係を構築するためにはどうしたらいいのかを考えていくべきです。

様々なコミュニケーション手段があることを学ぶ

- 例えば、聴覚障がい者のコミュニケーション手段は、その人の失聴年齢、聴力、家庭環境などによって異なります。一般的には、聴覚障がい者だから手話ができると思いますが、手話を習得していない人もたくさんいます。聴覚障がい者は一つの手段だけで十分な情報を得ているわけではなく、また、児童・生徒もコミュニケーションを手話のみでとることは難しいでしょう。
- 聴覚に障がいのある児童・生徒に対しては、まず、「書いて伝えること」や「背を向けたままで話さないこと」などが大切であり、教員も板書の際は、背中を見せて話さないことが重要になります。また、話すときは、メリハリのある話し方をしましょう。
- 児童・生徒が聴覚障がい者の日常生活での不便な状況を知り、思いを受けとめ、相手と相互に理解しあうためにはどのようなコミュニケーションのとり方があるのかを考えていく中で、手段としては、指文字、読話、筆談、要約筆記など、聞こえを補う方法が様々あることを学ぶことが大切です。

参考資料

13, 14 ページ

(1) 視覚障がいとコミュニケーション手段に関すること (13 ページ)

(2) 聴覚障がいとコミュニケーション手段に関すること (14 ページ)



A3

**打ち合わせ**

- 訪問の時期は、風邪が流行しやすい12月～3月までは避けた方がよいと思われますが、施設では年間を通じて様々な行事を予定しており、施設によって都合は異なりますので、できるだけ早い時期に相談するべきです。
- 福祉サービスの利用者の迷惑にならないよう、事前に施設や機関のしおりなどを読むとともに、十分な打ち合わせが必要です。まず、教員が事前に施設に行って利用者の様子を見て、施設についてよく理解した上で、児童・生徒に指導することが重要です。
- 教員の一方的な思いでの実践ではなく、福祉の専門家（施設や機関の方）と教育の専門家（教員）との協働で実践をつくりあげるというスタンスが大切です。そういう取組みを通じて、協働実践そのものの手法のおもしろさと意義に気づくことでしょう。

援助の仕方や交流の内容

- 児童・生徒ができる援助や交流については、様々な方法があります。福祉に関心をもち、学んでくれる人が増えることは福祉従事者にとってうれしいことであり、利用者も子どもがいると活気があって楽しいと思う人はたくさんいます。児童・生徒に何を学ばせたいかなどの目的や状況を具体的に施設に伝えて相談しましょう。
- かつては、みんなで励まして元気にしてあげましょうといった「慰問」のような視点での出し物やプレゼントをあげるなどの一方的なプログラムになりがちでした。訪問者と利用者との間に関係が築けていない状況でのモノのやりとりの前に、人と人との心のやりとりがまずあるべきです。
- 例えば、高齢者や障がい者から「思い」を聞き取り、「どう生きてきたか」にふれて人としての知恵を学ぶといった、利用者から「学ぶ」という視点を大切にされたプログラムをつくるのが重要です。

児童・生徒が主体的に取り組むようにする

- 指導者側の一方的な思いでつくられた学習プログラムでは、児童・生徒は交流に必然性を感じないでしょう。興味・関心のもてる導入の工夫や、福祉について考える時間を十分に取るなど、児童・生徒の感情や思考の流れに沿って、必然性をもって施設訪問が行われるようなプログラムを組み立てる必要があります。
- 受動的であっても、利用者や施設の方などの教職員とは違う関わりが、「小さな変化」をもたらすこともあります。また、変化には個人差があり、すぐには見えなくても、心の中に「小さな変化」が芽生えていることもあります。
- 受動的な児童・生徒については、気持ちを否定して封じてしまうのではなく、その児童・生徒自身の心の動きや背景に思いをはせたとき、どうすべきかが見えてくるのではないのでしょうか。優しいまなざしで見守りながら、気持ちを揺さぶるような働きかけを模索していきましょう。